

ジュニアラグビー



人見 隆

HITOMI Takashi

中川ヒューム管工業㈱
(本誌編集委員)

約30余年前の高校時代、私はラグビー部に入部し、約3年間ラグビーを経験した。当時ラグビーを選んだ理由は短絡的なものだった。中学時代にはバレー部に所属し、身長もそこそこ高かった。よって高校入学当初バレー部の先輩方から誘いを受けたが、当時は何となく室内競技には魅力を感じなかった。サッカーがやりたかったが、部員の多くは野球同様に小中学時代から経験値が高い。したがって“レギュラーになれるはずがない”と考えた。一方、ラグビー部は当時高校以降に設置されている学校が殆どで、唯一レギュラーになれる屋外団体競技であった。これがラグビー部に入部した理由である。

ラグビーはご存じの通り15人で戦うスポーツで、スクラムを組んで前へ突進するフォワード8人、パスを回してフィールドを駆け抜けるバックス7人に分かれる。私はバックスを希望したが、背が高いだけの理由でフォワードに配属された。ラインアウト(タッチラインを割った時に外から投げ入れたボールを取る)の時に重宝だと判断されただけで今でも思っている。ポジションはフランカー(スクラムでは側面に位置する)であった。怪我や擦り傷が絶えず、加えて痛いし疲れる、といった第一印象であったが、何とか3年間やり遂げた。



試合後に相手チームと記念撮影

今でも当時の仲間や先輩、後輩と酒を飲むことがある。私の1つ年上の先輩達は、県内でもベスト4に入り、県の高校選抜にも選出されたメンバーもいてなかなかの強豪チームであったが、私の世代の戦績は今一つであった。皆と再会すると試合や合宿など当時の記憶がよみがえり昔話で盛り上がるが、相変わらず先輩方には戦績も含めて頭が上がらない。いろいろあったが、今となってはとてもいい経験をしたと思っている。数年に一度であるが集まるのが楽しみだ。

私はあまりラグビーに熱くなれなかった方だが、年月の経過と共にとても良いスポーツだと思ふようになった。そしていつの間にか自分の子供達にラグビーを勧め^{せがれ}ていた。よって倅は幼年時代からジュニアラグビーを経験している。残念ながら娘はこの春に辞めた。学年が上がってきたこともあるが、少し無理強いさせていたかもしれない。倅が所属しているラグビーチームは、幼稚園児～小学生のジュニア、中学生、大人チーム・・・など、ジュニアだけでも100名を超えるビックチームである。男勝りの女の子(ラ・ガール)もいる。「すべての子供にすべてのチャンスを！」がモットーで、勝ちに拘らないチーム方針が気に入っている。6、7年前になるが、このジュニアラグビーチームにも私の1つ上の年代の高校の先輩がいた。それも当時ラグビー部主将だった先輩である。ラグビーに熱く、ジュニアチームでもヘッドコーチをしており、フィールドでは相変わらず熱血指導をしていた。子供達を入会させて間もなく私が後輩だということが漏れ伝わり、半ば強制的にコーチをすることとなった。久々にラグビーに携わることになったものの、スキルは低いし、沢山の^{せがれ}子供達にどう接したらよいか困惑したが、今となってはコーチ歴も古い方になりつつある。大学ラグビー経験者も多数いるので、技術的な指導は彼らに任せればよく、私といえば、もっぱら試合の審判



ぼくはラグーマン（幼年時代）

などのサポートをしている。

ジュニアラグビーは、就学前、小学低学年（1, 2年）、中学年（3, 4年）、高学年（5, 6年）の категорияに分かれている。幼少時代は、個人の体格や体力差が大きく、学年が1年違うだけで吹っ飛ばされることもあるが、年月の経過と共に皆遅くなる。6年生ともなれば、コーチが練習中に怪我を負わされることがあるくらいだ。しかしながら、試合となれば低学年の方が見ていておもしろい。ちょっと走力に勝っていれば、ステップを切っておもしろいようにトライをする子供もいれば、タックルされて戦意喪失し、立ちすくんだり、泣き出したりと目が離せない。モチベーションが勝敗を決するといってもよいかもしれない。調子に乗れば勝ち進むことが出来る。どうモチベーションを上げて試合に挑ませるかもコーチングのポイントの一つだと思った。

ジュニアの試合は、低学年は5人、中学年は7人、高学年は9人で戦う。学年が上がるにしたがって、フィールドも大きくなるがスキルも上がってくる。ディフェンスラインもしっかりしてくるので、思うようにトライ出来なくなる。足の速い選手でもそう簡単には相手ラインを突破出来なくなるわけだ。そうなるチームプレーが重要になってくる。マイボールをキープし、連続的に敵の空いているスペー

スに攻め込むには、瞬時の判断でチーム全員がそれぞれの役割を継続的に果たさなければならない。デフェンスも同様である。コーチは子供達に指示するというよりも、子供達自身に考えさせて、判断し、行動するように仕向けることが重要だ。ラグビーは、自ら考え、判断が求められることも大きな要素を占めるスポーツであり、それが大きな魅力になっているところだと思う。

コーチも含めた親はというと、どうしても試合に勝ちたくなる。むしろコーチ父親陣よりもママさん達の方が熱いかもしれない。そのような中、仮にトーナメント戦であっても子供達全員が出場出来る様にチームを編成しなければならない。試合に熱くなるばかりに勝ちに拘る様なメンバーを組むことはクラブ精神に反するからだ。廻りの雰囲気知らん顔して子供達を順次出場させるコーチ陣も因果な商売だが、最近はその方がいいと思うようになった。「すべての子供にすべてのチャンスを！」与えるべきであり、また、今大事なのは仲間とのコミュニケーションスキルを向上させることだと思っている。

我が倅はといえば、モール・ラック（密集でのボール争奪戦）に好んで入らず、頑張っている振りをするといったやや親に似ているところがある。それでも最近では時折トライを決めるようになってきた。相手につかまったり、倒されたときのボール捌きも上手になってきた。特に教えてないがいつの間にか身に付いているのには感心している。ボールを持ったら前へ走れと教えている。相手をかかわしたいところを直線的に突進するのは勇気があるが、なぜかこれだけは忠実に守っている。倅にはそこそこ信頼されているようだ。私は相手をかかわすべく横走りして倒され、全くゲインを上げられず監督に大目玉を食らった経験がある。それを倅に言いつけているだけなのだが。ラグビーは陣取りゲームだ。一步でも前へ出なければならぬ。

子供達にはラグビーを通して「人としての成長」がうながされればと思っている。コーチもそろそろ引退しようかと考えていたが、もう少し見届けてみようかとも思っている。